
次元の平和を守ります!!

如月 紅葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

次元の平和を守ります！！

【Nコード】

N6839X

【作者名】

如月 紅葉

【あらすじ】

全次元の平和を守ることを目的とした全次元最大の機関、その名も『全次元平和管理局』。そんな局に、1人の男が所属していた。その男の名は『御神貴京』。人間でありながら神々の王に次ぐほどの力を持った彼が、その力を振るって次元の平和を守っていく！！という感じの最強ハーレムラブコメディ！！最強、厨二病要素を多分に含みます。それらに嫌悪のある方は注意してください。なお、残酷描写は念のため付けてあります。

プロローグ『その男、規格外』

『全次元平和管理局』

それは、とある次元のどこかに本局が存在する、全次元最大の機関。全ての神の王『神王』を筆頭に、様々な次元、世界の動向を監視し、不穏な動きや無駄な干渉を察知、必要とあらば排除することで各次元世界の平和を保つことを目的とした、つまりは、名前通り全次元の平和を目的とした機関である。

これはそんな機関に所属する、1人の男の物語

「貴京様、ありましたか？」

「いや、全然」

全次元平和管理局本局、Dブロック『無限書庫』

ありとあらゆる世界の情報と知識が集まるその場所でも、最奥。

ありとあらゆる世界の禁忌が記された本ばかりが集まる、『禁書区画』。

並の人間なら立ち入るだけで精神を蝕まれ、全次元平和管理局でも一定以上の地位

を持つ者でなければ入ることすら許されない場所。そんな場所に、2人の人影があった。

最初に声を発した人影は、全次元平和管理局に所属する女性『アリシア・フォン・クラッツベルン』。後に声を発した人影は、アリシアのご主人様兼上司、同じく全次元平和管理局に所属する男『御神貴京』である。

「うーん、確かこの辺りにあったと思うんだがなあ」

見上げるほど高い本棚の前で、脚立に跨り本を探す貴京が首を傾げる。

「でも、神殺しの方法が書かれた禁書なんて、何に使うんですか？」

対して、自らの背丈で届く範囲で本を探すアリシアが、本を探している理由を聞かされてないことを思い出し、貴京と同じく首を傾げた。

「いや、俺が使う訳じゃない。そもそも俺はそんな物見なくても神殺しなんて余裕だ」

フフンと少し胸を張る貴京だが、それが冗談では無く本当だから恐ろしい。

「分かってますけど……威張って言う様な事じゃ……」

あまりに堂々とした貴京の発言に若干呆れた様子のアリシア、それを気にした様子もなく貴京は話を進める。

「俺の知り合いが邪神殺しの任務を受けてな、初めての神殺しだつて言うから、何かしらアドバイスをしようと思ったんだが……」

「思ってたんだが　なんですか？」

「面倒だったからな、代わりに神殺しの方法が書かれた禁書でも持って行ってやろうかと」

大カミングアウトである。

「ただの面倒臭がりじゃないですか……」

またも呆れるアリシアに、貴京が驚いたような顔をして一言。

「知らなかったのか？」

「知ってましたけど……」

「ですよー」

力を持たない者は近づくことさえ出来ない禁書区画には、あまりに

不釣り合いなほのぼのと間の抜けた光景である。

「ところで、その邪神殺しの任務を受けたお知り合いってどなたなんです？神殺しなんて結構なランクが無いと指令が来ない任務ですよね？」

邪神でも神は神、中には神王に迫る実力の邪神もいたりするのだ。

「んー？ライゼル・ハーネスだよ」

と、貴京の口から出たその名に、喋りながらも貴京の数倍の効率で本を探していたアリシアの動きがピタリと止まった。

「？ どうした？」

さらに自らをガン見してくるアリシアに、流石に貴京も本を探す手を止めて見返す。

「えつと……ライゼル・ハーネスさんって、あのライゼル・ハーネスさんですか？」

相変わらずガン見状態で発せられたその言葉に、はて何なのだろうかと思いつつも、貴京は自らの知る美青年の姿を思い浮かべて言葉を紡ぐ。

「んー、どのライゼル・ハーネスか知らんが、俺が言ってるのはあれだな、特務部部长、元老院第8位のライゼル・ハーネスだな」

「あのライゼル・ハーネスさんじゃないですかあー！！」

「うおう！？びっくりさせるなよ！！脚立から落ちるだろ！？」

アリシアの突然の大声に驚いた貴京は思わずバランスを崩す。しかし、脚立を斜めにしつつもなんとか持ち直すという芸当を見せた。

「あ、すみません、でもやっぱりあのライゼル・ハーネスさんじゃないですか！！」

シユンとして謝ったかと思うと、次の瞬間には大声を出す。こちらも中々に芸当と言えなくもない。

「あ、そうなんだ、あのライゼル・ハーネスさんなんだ」

対する貴京は殆ど興味無さ気、受け答えが超適當。

「そうなんだじゃないですよ……ハーネスさんって言ったら、オーバーSランクの局員じゃないですか」

「まあ、そうだな」

自分もオーバーSランクだったりする貴京はやはり超適當。

「というかそんな人に、神殺しの禁書なんて必要なんですか？いざとなったら力押しでさえなんとかなるんじゃない……」

「まあ、なるだろうなあ」

苦笑しながらそう言う貴京、未だに脚立は斜めのまま、さらにその状態で本探しを再開している。

「けどまあ、正しい対処法を知っておくに越したことは無いだろう?」

流石にいつまでも適当にあしらう訳にはいかず、本を探すちゃんとした理由を話し始める貴京。

「まあ、それはそうですね」

「それにライゼルは俺の親友だからな、万に一つも、いや、億に一つも兆に一つも

あいつが後れを取ることは無いと思うが、もしもがあったら困る、だから　ん」

「?」

「あつたあつた、これだ、ほら」

途中で言葉を止めたかと思うと、どうやら本を見つけたらしい。貴京が脚立から降りてアリシアに見せた本は

「『猿でも分かる神殺しの方法』　猿って……ええー……」

そんなタイトルに、非常にコミカルな表紙の本。間違っても禁書には見えない、むしろ普通の本屋にあってさえ違和感を覚える衝撃のデザイン。

「猿が神殺しをする訳無いのにな……もしかしてこの本の著者は馬鹿なのか?」

その目の付けどころはどこか違う。

「流石にそれはないでしょう……」

「だよな、馬鹿に神殺しの方法の禁書なんて書けるはずが無いし、きつとウケ狙いなんだろうな……それはもう見事にスベってるけど」

「ですね……」

しかしどうやら、その目の付けどころを訂正する者はこの場にはいなかった。

「まあ、内容が良いのは昔読んで分かってるから、後はこの本をライゼルに」

『全次元平和管理局本局、全館お呼び出しをいたします。御神貴京執務官、御神貴京執務官、局長がお呼びです。本局内にいらっしゃいましたら、Aブロック「局長室」までお越しください。以上でお呼び出しを終わります』

貴京の言葉を遮るように、透き通った美声が頭上から響く。勿論、頭上に誰かがいる訳では無く、その出所は天井に等間隔で設置されたスピーカー。即ち今の声は

「ありゃ、呼び出し……」

目的達成を目の前にしての呼び出しに、微かに残念そうにする貴京。

「局長直々の全館呼び出しですか……」

しかもそれは局長からの全館呼び出し。その強制力は副局長でさえ従わなければならないレベルであるからして。

「これは行かない訳にはいかないな、ということでアリシア、この本はお前がライゼルに届けてくれ」

「あ、はい、分かりました」

「じゃ、頼んだぞ」

残念そうだったのはほんの一瞬、あっという間に気持ちを切り替えた貴京の姿が、その言葉と共に掻き消える。

「禁書の力を封じるために神話級の術式阻害結界が張ってあるのに、いとも容易く転位。相変わらず、私のご主人様は規格外だなあ……」

貴京が転位の術式で移動した後、誰ともなくそう呟くアリシアだった。

プロローグ『その男、規格外』（後書き）

拙い文章だと思いますが、これから頑張っ て行きますので、宜しく
お願いします！！

第1話『任務受諾』

コンコン

『はい』

「御神貴京です」

『入りなさい』

「失礼します」

禁書区画から転位の術式で即座に局長室の前に移動した貴京は、特に気追うことも無く局長室に入室する。

「速かったわね」

扉を入れて正面にあるデスクで、両肘をついて腕を立て、組んだ手の甲の上に顎を乗せて微笑む銀髪の美女。彼女こそが貴京を呼び出した『全次元平和管理局局長』にして、全ての神々の王である『神王』、『シルヴィア・ローゼンベルグ』である。

「転位の術式を使って来ましたからね」

「あら？今日は禁書区画にいたんじゃないかったの？」

さらりと出た貴京の言葉に、思うところがあるのか可愛らしく小首を傾げるシルヴィア。

「何故俺のいた場所を知っているのか非常に気になりますが……そうですね、禁書区画でちょっと探し物をしていました」

対する貴京は、一言も告げていない（というか告げる必要性からして無い）自らの居場所を神王が知っていたことに対し、何やら変な顔になる。

「あそこには、あらゆる禁書の能力を封じるための神話級の結界が張ってあったはずだけど……」

「あの程度の結界で俺の術式を封じられるはずないでしょう」

さも当然というような貴京のその言葉に、シルヴィアは一瞬驚いたような顔を見せたが、その表情はすぐに苦笑に変わった。

「あの程度って……あれは術法研究室の室長が直々に張った神術結界よ？局内でも

それを指してあの程度って言えるのは貴方を含めて数人位よ……」

「実際あの程度だったのだからしょうがないだろう……」

いつの間にか口調が素に戻っている貴京だが、シルヴィアはそれを気にした様子もなく席を立つと、人差し指をピツと立てて貴京に詰め寄る。

「良い？貴方は表向き特に強大な力を持っている訳でも無い、一般の局員ってことになってるんだから、その辺の行動はちゃんと考えてしてよね？」

そう言うシルヴィアは、宛ら近所のお姉ちゃんといった風情。

「分かってる、分かってるよ、てか顔が近いッ!」

それに対し少々焦ったように言って一步下がる貴京だが、それは仕方なく。

神王であるシルヴィアは、戦闘能力が全次元最強を誇るのは勿論、その容姿もまさに規格外である。完璧な容姿を持つ人物を指して『神に愛された』などという事があるが、シルヴィアはその神の王なのだ、最早その容姿に非の打ち所は無く、貴京の様に少々たじろぐだけという方が異端なのだ。

常人ならば男女問わず骨抜きにされてもなんら不思議ではない。むしろ先程言ったようにされないとおかしい。貴京おかしい。

「あら、御免なさい」

そんな超絶美女シルヴィアは、当然の如く自らの容姿の良さを自覚している訳で、先程の行動も言うまでもなくわざとである。それを証明するかのように離れてから悪戯っぽく笑う彼女を見て、貴京は疲れた様な表情を浮かべながらも、話を先へと進めた。

「それで？わざわざ俺を呼び出したってことは何か重要な案件があるんだろ？」

表向きは『神王にちよつと気に入られてる一般的な執務官』で通っている貴京だが、実際は最高位ランクである『SSSランク』の保有者にして、全次元平和管理局で神王以外の命令系統からの強制力を受けない唯一の部隊『神王直属部隊【神衛】』の2人しかいない

隊員の1人にして、部隊長だったりする。

そんなポストにいる理由は色々あるのだが、一番は貴京が管理職を面倒臭がったからである。背負う必要もない面倒事をわざわざ背負うのは御免だ、とは貴京の談。

「特別に、頼みたい任務があつてね」

「特別任務？『神衛』を動かすほどの任務があるのか？」

先述したとおり、神衛は局内でも有数の特殊部隊であり、2年に1度任務があれば多い方である。任務が無いときなんか軽く4、5年は任務が無い。それなのに給料はいつも通り貰えるという特別待遇、神衛万歳。

「そうなの、とりあえず任務について説明するわね」

「ああ、分かった」

貴京が頷くと、局長室の照明が緩やかに暗くなり、今まで窓だった場所に神術でウィンドウが投影される。最新の液晶テレビも真っ青な高画質ウィンドウに映し出されているのは一つの惑星。

青と緑で構成されたその美しい惑星の名は

「『アルカディア』。今回の任務地となる惑星よ」

「アルカディア……地球と似て綺麗な惑星だな」

ふと、自分の生まれ故郷を思い出し、懐かしむ様な目になる貴京。

「ええ、基本的な構造は貴方の生まれ故郷である地球と同じよ。ただ、魔術や魔法といった技術が存在していて、人間の他にも獣人やエルフ、魔族といった種族が存在するわ」

「ふむ」

「そして今回の任務で重要になって来るのが魔族、その中の『魔王』よ」

シルヴィアのその言葉と共にウィンドウの映像が切り替わり、いかにも魔界といった感じの混沌とした大地が映し出される。

「『魔王』……基本的に魔族の王として魔族最強の力を誇る存在。アルカディアの魔王もその解釈で合っているか？」

「ええ、通常はね……」

「通常は？」

何か含みのある言い方に、任務の核心に迫った気がして貴京の目が鋭くなる。そして、貴京のその読みは見事に的中していた。

「今回はその通常と異なるのよ、そしてそれが次元世界の平和に脅威をもたらすとして、今回正式に全次元平和管理局での任務として承認された」

そう言ってシルヴィアが取り出したのは一枚の書類。それを受け取った貴京が、声に出して読み上げる。

「『アルカディアに出現した通常とは一線を画す能力を保有した魔王の討伐』……」

「そう、今回の目標であるアルカディアの魔王は、保有する力が強大すぎるの。一魔王が持つにしてはあまりに強大、次元世界に脅威をもたらす可能性は勿論、下手をすれば次元間戦争を起こす可能性さえ否定できないわ」

「なっ……」

シルヴィアのその言葉に、貴京は思わず目を見開いた。何故なら彼は、世界の根本的な構造を知る存在だから。

「貴方が驚くのも無理は無いわね。貴方も知つての通り、通常、世界にはあらかじめその世界を創造した神によって根本的な情報が刷り込まれる。いわばプログラムの様なものね。本当に大まかなものでしか無いけれど、その世界に生まれる存在が、生まれながらにして個人で保有できる力の上限など、根本的な部分はそれによって世界創造の際に決められている、魔王の能力値上限もね」

それは『星の意思』や『神の意思』などと呼ばれたり、『アカシツクレコード』の根本になったりもする情報、後から得たなら話は別だが、生まれながらにしてその根本的な情報を無視した力を保有するなど、通常はあり得ないことなのだ。

「だけど今回は、その根本的な情報を無視した魔王が生じた、ということか」

「その通り、根本的な情報をプログラムと呼ぶなら、バグと言ったところかしら？それによって、通常は生まれるはずのない、強大すぎ

る力を持った魔王が生まれた」

シルヴィアがそう締めくくると、展開されていたウィンドウは消え去り、部屋の照明も元の明るさに戻る。

「今回の任務はその魔王の討伐、次元世界に脅威を与える前に、速やかに討伐する必要性があるわ。さらに存在自体がバグである今回の魔王、他にどんなイレギュラーが起こるか分からない。その辺りを考慮した結果、貴方達『神衛』に任務を任せようと思うのだけど、受けてくれるかしら？」

シルヴィアの口調は問いかけだったが、その言葉に乗った思いに問いかけの要素は無く

「勿論、お任せ下さい」

シルヴィアの予想通り、貴京は迷うことなく即答した。その表情には微塵の迷いも無く、不敵な笑みさえ浮かんでいる。

「ふふっ、それじゃあこの書類にサインして」

その返答を受け、シルヴィアは既に用意していた書類とペンを差し出す。それにサラサラと流麗な文字でサインして行く貴京。それを見ながら、シルヴィアは任務の詳細を口頭でも説明して行く。

「任務達成期限は1年以内、それ以内に達成されなかった場合はこちらから応援を送るわ。任務中の経費は申請してくれば基本的に局が持つけど、あまりに私的な理由なら貴方の給料から問答無用で引いておくからそのつもりで」

「了解つと」

サインを終えた貴京が書類をシルヴィアに手渡し、シルヴィアはそれをチェック。記入漏れなどが無いことを確認し、通常ならこれで任務の要請と受理は終了なのだが、

「最後に二つ」

「ん？」

既に踵を返し、部屋の外に出ようとしていた貴京の背中に声が掛かる。

「一つは可能ならという範囲での追加条件、いわゆるサブクエストね。アルカディアは比較的良い人材が豊富なようだから、もし局でもやって行けそうな人を見つけたらスカウトして貰えると嬉しいわ」

常に新しい人材を欲している全次元平和管理局では、新しい人材のスカウトも常日頃から行っており、任務の追加目標として提示されることはそこまで珍しく無い。

「ふむ、了解だ。もう一つは？」

二つ返事で了承する貴京。すると、シルヴィアの表情から笑顔が消え、急に真面目なものになる。そして紡がれたのは、強い思いが乗った一つの言葉。

「こっちは絶対遵守条件　何があろうと決して、死んでは駄目よ？」

神王としてではなく、1人の女性『シルヴィア・ローゼンベルグ』として放たれた微塵も冗談の気配が無い真剣なその言葉に、貴京は一瞬驚いたような表情を浮かべたが、その表情はすぐに消え

「勿論だ。約束するよ、シルヴィア」

何者をも安心させる様な不敵な笑顔でそう返して、颯爽と部屋を出た。

「ふふっ、行ってらっしゃい、貴京」

その背にそう声を掛けるシルヴィアの表情は、安心で綻んだ、優しいな笑顔だった。

第2話『異世界への旅立ち』

「……ということで、今回の任務はそんな感じだ、OK?」

「はい、分かりました」

全次元平和管理局Aブロック、隠し通路最奥『神衛執務室』

神衛に所属する部隊員を除けば、局でもほんの一握りの上層部しか存在を知らない隠し通路、その最奥に位置する神衛執務室と呼ばれる部屋。たった2人の局員で構成された部隊の為に作られたその部屋の中に、シルヴィアから任務を受けた神衛部隊隊長『御神貴京』と、ライゼルに本を届け終え、今しがた任務の内容を聞いた神衛部隊隊員『アリシア・フォン・クラッツベルン』の姿があった。

「しかし、バグによって生まれた魔王の討伐……ですか」

「ああ、何があるか分からんから、気を引き締めて行くぞ」

「はい、分かりました……でもまあ、貴京様に任せておけば何とかなりそうですね」

涼やかな笑顔を浮かべてのアリシアのその言葉に、貴京はあからさまに顔を顰める。

「お前……俺に任せておけばなんでもかんでも何とかかなると思っ
ないか?」

「え？ ならないんですか？」

その疑問の声と表情はどう見ても素である。

「いやそりやなるわけ……なるわけ……なるかもなあ……」

なるのかよ。

「ですよー」

「ま、まあそれでも！！ 用心するに越したことは無い、良いな！！」

「はい」

一見先生に遠足前とかで注意を受けてる絵にも見えなくて、少なくともこれだけ見たら魔王討伐に赴く部隊だとは誰も思わないだろう。

「さて、それじゃあ行くか」

気を取り直して貴京はそう言うと、何気ない動作で右腕を軽く振る。すると、見る見る内に貴京とアリシアの目の前にある空間が裂け、人1人が楽々通れる大きさの空間の裂け目が完成。下手な3分クッキングよりお手軽である。

「見た目は真つ黒な空間の裂け目だけど、いつも通り座標指定はちゃんとしたから、

飛び込めば向こうの世界に付けるはずだ、心配はいらない。大丈夫だ、問題無い」

無駄に安全性を強調する貴京を見つつ、アリシアは達観したような調子で言う。

「今の動作だけで次元を超えるゲートを作るなんて……相変わらず規格外ですね」

「ふつ、褒め言葉として受け取っておくよ」

貴京は軽く笑ってそう言うと、アリシアより先に微塵も躊躇せず空間の裂け目へ飛び込む。

「ええ、褒めてますから」

その後が続くように、すぐさまアリシアも空間の裂け目に飛び込み、ゲートが自動で閉じられた。

こうして貴京とアリシアは、異世界に降り立った

第3話『男性は野郎、じゃあ女性は何?』

「ここが、『アルカディア』か……」

「なんというか……『森』ですね」

「『森』だな」

貴京とアリシアの2人がアルカディアで最初に降り立った場所、それは木々が鬱蒼と生い茂る森の中だった。といっても、別に考え無しに降り立ったら森だったとかいう訳じゃない。

「ここから徒歩で15分の場所に『フォルアス』という中規模の街があるらしい。

まずはそこに行くぞ」

「分かりました」

任務を受ける時にシルヴィアから受け取った資料の一枚を見ながら貴京がそう言う。そこに記されているのは、『アルカディア』の基情報はもちろん、今回貴京が次元間移動ゲート（空間の裂け目）の座標指定に用いた座標などである。

あらかじめ局の方で、『人目に付きにくく、なおかつ街や村が近い』という条件の場所を転位ポイントとしてピックアップしてくれているのだ。なんという心遣い。貴京はそれを見て座標を指定し、こうして比較的近くに街がある森の中に無事転位できたわけである。

といっても

「貴京様」

「なんだアリシア」

「見てください、可愛いわんちゃんですよ」

「あれが犬に見えるんなら眼科に行けこの野郎」

「乙女に向かって野郎とはなんですかッ!!」

そんなコントを繰り広げる2人の視線の先、10m程離れた場所に
いるのは一匹の狼。それもただの狼では無く、明らかに全身から
『俺モンスターですよ』的なオーラを

発する体長5mを優に超えそうな巨大な狼である。

そう、いくら局の方でピックアップされた座標といえども、現地で
の安全までは

完全に確保することは出来ない。

比較的安全性の高い場所が選ばれているはずであるが、あくまで最
低ラインは転位した際に湖や海、火山の真上なんて事にならないた
めの、立地的安全性のみである。

なのでこうして実際に転位してみると、モンスターとエンカウント
したり、運悪く現地の住人と鉢合わせ、なんてことも割と良くある
のだ。

「さて、どうする、あいつから見たら間違いなく俺らは餌に見えて
るだろう訳だが」

「でしょうね……でもまあ、当然食べられるのは嫌なので、貴京様、やっちゃってください」

完全に丸投げする部下に、アリシア 貴京 上司が顔を顰める。

「お前……こういうのは基本部下が」

ザワツ!!

苦勞人上司である貴京は当然の如く抗議の言葉を上げたが、しかしその言葉は途中で途切れる事となった。こちらを見定めるようにじつとして動かなかった巨狼が、完全に狙いを定めたと言外に宣言するかのように刺す様な殺気を放ってきたからである。

当然そんな事があれば貴京の顔はより一層顰められる。

「邪魔をするのか……雑魚が」

ゴオツ!!

瞬間、アリシアと巨狼は貴京を中心に風が渦巻いたように“感じた”。

そう、感じただけ、それは本来実体を持たないはずの殺気。巨狼の殺気などとは比べ物にならないほど濃密な殺気が、貴京から発せら

れる。そのあまりの威圧感に、巨狼は生まれて初めて、明確な死の気配を感じた。明確な死の気配を感じたのだから、次の瞬間には野生の本能に応じて逃げ出したかもしれない。

しかし、それは叶わなかった、巨狼が死の気配を感じた瞬間には全てが決着していた。

「この程度の動きにも反応できないのか、本当に雑魚だったな」

響き渡る冷やかな貴京の声、先程まで巨狼から10m程離れた場所にいたはずの貴京は、いつの間にか巨狼の目と鼻の先に立っていた。そしてその手に握られているのは、鞘から抜かれた一振りの西洋剣。普段貴京が腰に帯びているその西洋剣は、今は巨狼の眉間に根元まで深々と刺さっている。

「狙った獲物が悪かったな……」
「ヴァルカン炎神の戯れ」

『炎神の戯れ』の一言と同時に、西洋剣の剣身に魔法文字ルーンが浮かび上がる。

次の瞬間、全てを焼き尽くす神の業火がその剣身から溢れ出た。

巨狼の眉間に刺さったままの剣身から溢れ出た灼熱の業火は、完璧な指向性を以って巨狼の体だけをあつという間に焼き尽くす。5m以上あったその勇壮なる巨体が灰も残さず燃え尽きるまで、10秒もかからなかった。

「相変わらず、規格外に強いですね、貴京様は」

貴京が巨狼に殺気を向けてからずっと黙っていたアリシアが、ひよこひよここと小走りで寄って来ながら言う。

「今のなんて力を出した内にも入らん、良いから行くぞ」

それに対し貴京は、明らかに慚然とした態度で剣を鞘に納めると踵を返し、アリシアを待たずにスタスタと歩き始める。

「ああー待つて下さいよ！そんなに怒らないで！..」

「一度上下関係について、しっかり覚えさせる必要があるか……」

「ひっ！？ちょ、待つて下さい貴京様！！ちゃんと部下らしくしますから！！」

一瞬、非常にドスの利いた声で貴京が呟いたのを聞き、アリシアは涙目になりながら後を追う。

こうして、ちょっとしたトラブルがありながらも、貴京とアリシアは『アルカディア』にやって来て初めての街、『フォルアス』を目指すのだった。

第4話『律儀な衛兵と観光都市フォルアス』

「ほう……これは」

「わー、凄いですね!!」

フォルアスがはっきり見えるほど近くにやってきて、貴京とアリシアが最初に放った言葉は、それぞれそんな言葉だった。

内容こそ違えど、2人共その言葉に込められた意味は『感嘆』。

巨狼とのエンカウントにより少々機嫌を損ねた貴京と、それによって身の危険を感じて涙目になっていたアリシアだったが、それを一瞬にして忘れてしまうほど、フォルアスは美しかった。規模こそ書類に書かれていた通り中規模であるが、道はしっかりと整備され、建物は全て純白の石造り、道の脇に開かれている露店の配置もしっかりと決まっているのか、全体的に調和のとれた非常に美しい街並みである。

「まさか此処まで綺麗な街並みとはな、適当に情報収集だけでもっと大きな街に今日は泊まるつもりだったが、ここで一泊するのも良いかもしれん」

「そうですね、私も賛成です」

そんな言葉を交わしながら歩く2人は、あっという間にフォルアスの入口までやってきた。

仰々しい門などはないが、石造りのゲートのような物の横に、小さ

な小屋が建っている。

その前に1人、中に1人、衛兵らしき人物が見えるため、恐らく関所なのだろう。

「その2人、止まってくれ」

そう貴京が予想した通り、ゲートの目の前まで来ると、小屋の前に立っていた衛兵がこちらへと寄って来て、一度静止を求められる。当然無視する理由など無いので、その言葉に従って止まり、頭を下げる。

「お勤め御苦労さまです」

挨拶は基本である。社会的にも 情報を多く必要とする仕事の都合としても

「いえいえ、旅の方ですか？」

貴京の挨拶に一瞬驚いたような顔をした衛兵だが、すぐに笑みを浮かべると、定例句の様にそう聞いてきた。

「ええ、こっちの……妻と一緒に旅を」

一瞬アリシアのことをなんと説明するか迷ったが、従者というのはちょっと違うし、身なりのにも妻の方が良さそうだったので妻と説明する。

「成程、お綺麗な奥さんですね」

「ありがとうございます、ふふっ」

衛兵の言葉に、相手の警戒心を丸ごと消し去る様な柔和な笑みを浮かべるアリシア。上司に面倒事を丸投げしたり、ちょっとした冗談で涙目になったりなアリシアだが、実際は局でも実力者の部類に入る非常に優秀な局員であり、相手の警戒心を解くのもお手の物である。

「『フォルアス』についてはご存知ですか？」

「いえ、名前位しか……」

殆ど警戒心が無くなっている衛兵の問いかけに貴京がそう答えると、衛兵は一つ頷き、最低限知っておく必要のあるフォルアスでの注意点を告げる。

「でしたら、私の方から一つ注意を。此処フォルアスは、近隣でも美しいと評判の景観が自慢の街です。貴方達は違ったようですが、街並みが見たいという理由で訪れる方も少なくありません。商業も産業もあまり盛んでは無いこの街は、『観光収入』が大部分を占めています。なので当然、ゴミのポイ捨てなどには非常に厳しいです。最悪の場合衛兵に逮捕されることもありますので、十分ご注意ください」

「はい」

「分かりました」

ゴミのポイ捨てなどで逮捕され、もし任務に支障でもきたしたら面目丸潰れである。絶対に気をつけようと、貴京もアリシアもしっかり

りと心に留める。

「重要な注意点はこれのみです。これにさえ気を付けていれば、他の街と大した違いはありません」

「成程、ありがとうございました」

「いえいえ、それでは、フォルアスによつて」

一通りやるべきことは済んだのか、衛兵は道を開け、貴京たちをフォルアスの中に招き入れようとするが

「あ、その前に一つ」

それを遮ったのは、他でも無い貴京だった。

「何でしょうか？」

貴京の言葉に思わず首をかしげる衛兵。まあ、この流れでどんな質問が来るのか予想出来るのは相手の心が読める人物位だろう。

「あそこの、あの森。普通にモンスターがいますよね？目と鼻の先にある森の中にモンスターがいるのに、外壁が無いどころか、街の警備がこんな手薄で大丈夫なんですか？」

そう言つて貴京が指差すのは、先程巨狼とエンカウントした森である。巨狼とエンカウントしたのは比較的街と離れた地点だったが、森自体は街のすぐ近くまで続いている、直線距離で200mと言つたところだろうか。

これほど至近距離にあるのだ、モンスターが森から出てきて街を襲うという可能性は比較的、というよりかなり高いだろうと予想した貴京だったのだが、

「ああ、それならご安心を」

返って来たのは衛兵のそんな楽観的な言葉と笑みである。

「?……どうのことですか?」

「その森、『宵闇の森』というのですが、『宵闇の森』のモンスターは闇を好みますので、基本的に森の外には出てこないんです。夜になればその限りではありませんが、この関所で明かりを焚きますので、夜もモンスターが街を襲いに来る可能性はほぼ皆無です」

「成程……」

衛兵の言葉に貴京は納得して頷く。

「ですので、安心してフォルアスでの滞在をお楽しみください」

そう言って再び笑みを浮かべる衛兵。どうやら街の安全性に疑問を感じての質問だったと思ったようだが、実際はただの興味である。

「ご丁寧にありがとうございます」

といっても、特に正す必要があるわけでもないので、貴京はその言葉に頷いて礼を言う。

「いえいえ、それでは、改めまして、フォルアスへようこそ！」

今度こそ衛兵のその言葉と共にゲートをくぐり、フォルアスの大通りへと足を踏み入れる貴京とアリシア。

ちなみにその瞬間貴京が考えていたのは、『改めて言い直すなんて律儀な衛兵さんだなー』とかいうフォルアスと全くと言っていいほど関係ないことだったのだが、それこそどうでも良い些事である。

第4話『律儀な衛兵と観光都市フォルアス』（後書き）

アルファポリスさんに登録してみました。

私の小説を気に入っていただけたなら、是非バナーをクリックして貰えると嬉しいです。

第5話『宿での揉め事は最早テンプレ』

『見た感じはかなり綺麗だったけど、実際歩いてみると見た目ほどでは無かった』

というのは貴京が今まで訪れた観光都市で、何度か抱いた感想である。歩いてみても見た感じと感想が変わらない都市と、実際歩くことによって評価が少しばかり落ちる都市、割合は4：6といったところだろうか。

しかして今回訪れた観光都市『フォルアス』は、前者の4割に入る都市だったようだ。近くで見ても家屋などに汚れは殆ど見えず、むしろその純白の石造りが輝いて見える。街を歩く人々も活気に溢れており、非常に良い街だ、というのが正直な感想。

「その兄さん！！今日は良い肉が入ってるよ！！どうだね？串焼き一本！！」

「いやいや兄さん！こっちの果物こそあなたには似合うよ！！」

「ははは、また時間がある時に寄らせてもらいますよ」

大通りを歩いていると、道の両端に軒を連ねる露店から引つ切り無しに客引きの声が掛かる。どれも中々に興味を惹かれるのだが、残念ながらもまずは今日泊まる宿を探さなければならぬため、時間が無いのだ。

本来なら今日は別の街に泊まる予定だったが、貴京もアリシアもフォルアスを結構気に入ったため、今日はフォルアスで一泊すること

にしたのだが…

「うーむ、宿あるかなあ」

なんといつても、この美しい景観を持った観光都市である。

当然観光客も多く、宿泊客も多い。それに合わせて宿の数も相当数に上るのだが、どの世界でも共通で宿の品質はピンからキリまで様々。せっかく宿泊するのだ、できる事なら快適な宿に泊まりたいというのが人の心理である。

宿泊費も局の経費で落ちることだし、というのは貴京がさり気なく抱く思い。

そんなこんなで、できる限り早く宿を確保したいという意味で『時間が無い』なのだ。日没までの時間という意味でなら、現在はまだ昼前なのでかなり時間はある。

ちなみに現在貴京は1人で歩いており、アリシアとは別行動である。街に入ってしばらくは一緒に歩いていたのだが、貴京が宿は俺が探しておくからと、情報収集を命じたのだ。

現在は街の色々なところでフォルアスについてのこと、近隣についてのこと、そして魔王のことなどを聞いて回っていることだろう。

戦闘においては万能を誇る貴京だが、どうも情報収集や諜報などは得意じゃない。なので、基本的に情報収集はアリシアの役目である。

『うるせえつつてんだよ!!』

『お客さん！止めてください！！』

「ん？」

と、スタスタ足早に歩いているように見えて、実はしっかり道の左右どちらの宿にも気を配りながら、良さそうな宿があったら入ってみようと思っていた貴京の耳に、男の怒声と、女性の叫び声が入る。

「あの宿が……」

音源に目を向けると、そこにあつたのは1軒の宿屋。見た目も雰囲気も中々良さそうだが、先程の声的にやはり中で何か揉め事が起きているのか、先程から何人もの人々が逃げるように飛び出している。

中には躓いて転ぶ人もおり、物理的にも体裁的にも非常に痛そうだ。

「……ふむ、行ってみますか」

誰ともなく呟き、その宿屋へと足を向ける貴京。一度気付いた争い事をそのまま見て見ぬふりするつもりは無いし、何より結構良質そうな宿屋だ。運が良ければ泊まれるかもしれないと思いながら、貴京は先程以上に足を速めてその宿屋へと入って行った。

第6話『中年男と剣と、神速の刺突』

「お邪魔しま　　うわっと」

宿屋の入り口をくぐった貴京の目にまず入ったのは　飛来するビールジョッキ。最早視界いっぱいと言っても過言では無い程に迫っていたそれを、貴京は驚異的な反射神経と身体能力で見事に掴み取る。

「危な……俺じゃなかったら顔面直撃だぞ……」

そう呟きながらビールジョッキを落とさないように握り直し、貴京が宿の奥に目をやると、

「お客さん！！なんてことを！！」

「うるせえ！！俺に指図するんじゃないやねえ！！」

カウンターの近くで店の関係者と思われる女性と、顔を真っ赤にした中年の男が口論を繰り広げていた。

店の関係者と思われる女性と中年の男は、中年の男がカウンターに背を向ける形で向かい合っており、その近くには酒の肴と思われる料理が数品置かれているが、肝心の酒が無い。恐らくは先程飛んできたビールジョッキが本来あの場所にあったのだろう。

投げたのは　見た感じは中年の男の方が、と貴京が当たりを付ける。

「しかし……あのおっさんの恰好は……」

次に貴京が目をつけたのは中年男の服装。それは先程、フォルアスの入り口にある関所に立っていた衛兵と同じ鎧だった。つまり普通に考えると、あの中年の男は衛兵ということになる。

「うーむ、いくら酔つてるといっても衛兵があんな暴拳に出るか？
そもそも衛兵

ならあんなになるまで飲むとは到底思えないんだが……」

顔が真っ赤であるし、ビールジョッキが空だったことから中年の男が酔っていることはほぼ間違いないのだが、それでも此処までの暴拳は些か異常である。そもそも衛兵、さらに老練そうな中年の男が自分を見失うとは思えない。

酒以外にも恐らく理由がある。貴京はそう思い、もう少し情報を得ようと、周りの野次馬達に声をかけようとしたのだが

「これ以上周りの人に迷惑を掛けるようなら、今すぐ此処から出て行って」

「ええい！！うるさいと言っているだろう！！」

響く怒声と共に貴京が感じたのは微かな殺気。

自分に向けられたものではないためほんの微かだが、それでも一気に振り撒かれた分はつきりと感じられるそれは、一際大きな怒声を発した中年の男からのものだった。

「きやつ ！？」

短く響く女性の悲鳴、事態に気付きどよめく野次馬。

腰に伸びる、中年男の手。

中年の男の恰好は、関所に立っていた衛兵と同じものである。

そう 腰武装の剣に至るまで。

「 ちっ！！」

貴京は短く舌打ちすると、周りの野次馬に声を掛けるため踏み出そうとしていた右足に通常の数倍の力を込めて床を蹴った。莫大な力を受けた床板が軋み、貴京の体が驚異的な速度で加速する。その身に纏った漆黒のロングコートを翻し、残像を残しながら駆ける貴京。残像を残すほどの圧倒的速度、宿屋の入口とカウンターほどの僅かな距離を詰めるのに要する時間など、ほんの一瞬。

瞬く間に中年の男に接近した貴京は、これまた残像を残すほどの速度で腰の剣へと手を伸ばし、そのまま流れるような動きで抜刀。刺突の要領で、未だ3分の1程度しか抜かれていない中年男の剣を横から串刺しにする。

ギャギンッ！！

響く金属音と共に、横から突き刺され根元から真っ二つに折れる中年男の剣。

周囲の人間は勿論、女性にしても、中年男にしてもまさに一瞬の出来事。その一瞬でこの争いの中心に立ってしまった貴京は、とりあえずは事無きを得たことに安堵しつつも、少々厄介な事になったと顔を顰めた。

第7話『事態の収束と、宿泊先』

パチンツ、という納刀の音が辺りに響き渡る。先程までと打って変わって、それほどまでに現在の宿屋は静まり返っていた。驚きのあまり、貴京以外の全員が固まってしまっているのだ。

「……………てめえ!!」

しかし、石化の魔法を食らったわけでもないし、驚きによる硬直はあつという間に解ける。他の者より数瞬速く我に返った中年の男は、最早切断どころか、相手を殴ることすら不自由するレベルになってしまった剣（の柄）を投げ捨て、貴京へと掴みかかった。

「おっと」

勿論、そのまま良いようにされるつもりなど毛頭ない貴京は、自らの胸倉へと伸びてきた中年男の右手を左手でがっしりと掴み取る。身長は高いが細身な貴京に対し、中年男は身長こそ貴京に及ばないものの、その体格はかなりがっしりしている。

傍から見れば、10人中7人は中年男の方が力は強いと予想するだろう。

しかし

「ぐっ、このっ！」

貴京は全次元平和管理局でも最強の部類に入る男である。見た目での評価なんて毛ほども役に立たない。その膂力や握力は常軌を逸す

るものであり、がちりと掴まれた中年男の右手は、押しても引いてもびくともしないという状況に陥っていた。

「離せてめえ！！」

「自分から掴みかかっておいてそれは無いだろう……」

酒臭い息を吐きながら怒鳴り散らす中年の男に対し、貴京は呆れた様な表情を見せ、右手を中年男の胸へと宛がう。

「とりあえず、俺も危害を加えられそうになったわけだし、これは正当防衛だ。それに、状況を把握するにはしばらく大人しくして貰った方が良さそうだしな」

「あ？何を」

ベコンッ！！

「がつ……あ……」

中年男の胸から鈍い金属音が響くと同時、その体から力が抜けて床に崩れ落ちる。見ると、貴京が右手を当てていた鎧の胸当て部分が、まるで鈍器で殴られたかのようにベッコリとへこんでいる。

『堅牢に作られているはずの鎧が手を当てただけでへこんだ』

その常識外の光景に、間近で見ていた女性や近くの野次馬達が目を丸くする。実際は手を当てた後、掌から魔力の塊を直接放出することによって男が気絶する程度の衝撃を与えたのだが、それに気付く者はこの場にはいなかった。

「あ、あの……」

「ああ、状況把握の邪魔になりそうだったので、少々気絶して貰っただけです。1時間もすれば目を覚ましますよ」

あまりに激しい状況の移り変わりにオロオロしている女性に、貴京は微笑みながら言葉を返す。目を覚ました後の反応が少々面倒そうだが、たかが掴みかかられた位で殺す訳にはいかない。

しばらくは胸の痛みが取れないかもしれないが、それもしばらくすれば治るだろう。これだけの騒ぎを起こし、止めなければ人を殺していたかもしれないのだ、多少の怪我位我慢して貰おうと、貴京は考えを完結させる。

「さて、それじゃあ静かになったところで、状況を説明して貰えますか？」

「あ、分かりました　でもその前に、ありがとうございました。貴方がいなければ私はその男の人に……殺されていたかもしれません」

恐怖がよみがえったのか、顔を青ざめさせる女性に、貴京は優しく言葉を掛ける。

「いえいえ、助ける力があるのなら、誰でも同じような行動をしましたよ」

感謝の言葉を受け取りつつも、『助ける力があるのなら』という発言によって野次馬が行動しなかった点を擁護する貴京の言葉に、女性には優しい微笑みを浮かべた。

「貴方は、お優しいですね」

「優しくあろうと、努力はしています」

貴京と女性がお互い笑みを浮かべるその光景は、つい先ほどまで繰り広げられていた争いを微塵も感じさせないものだった。

「それじゃあ、説明しますね、まずは」

「そこで貴方が現れた、ということです」

「成程、そう言うことでしたか」

状況を纏めると

中年の男は、元は衛兵だったのだが、今日、この宿屋にやってくる前に衛兵をクビになったらしい。理由は中年男の勤務態度の悪さ、酒癖が悪く、警邏中に酒を飲んでることさえあったとか。

勤務態度以外の能力はそこそ優秀ということで今日まで衛兵を続けられていたが、先日、街の酒場で警邏中に酒を飲み泥酔、そこを上司に見つかり、ついにクビになった。それにより衛兵の宿舎からも追い出されて宿無しになり、この宿にやってきて、1階に併設されている食堂で自棄酒をあおり、自らを見失うほどに泥酔。飲み過ぎだと心配した女性に逆ギレし、先程の争いに至る、ということらしい。

そう説明してくれた女性の状況説明は非常に分かりやすく、それでいて簡略化されており、貴京でも感心するほどだった。

「しかし、そうなるの一つ疑問が」

「?」

首を傾げる女性を見つつ、貴京が床に倒れ伏している中年男　よ
り正確に言えば中年男が纏っている鎧を指差す。

「衛兵をクビになったのなら、鎧や剣も返却されるのでは?この鎧や剣は衛兵としての支給品でしょう?」

「そつえば……そうですね」

女性が今思いついたような反応を見せるが、いきなり逆ギレされて果ては殺されかけるほどの体験をしたのだ、細かな事を考えている余裕が無かったのは当然だろう。

「何故なのでしょう……」

首を傾げる女性に、一瞬考えを巡らせた貴京が思い付いたことを口にする。

「普通に考えれば、返却は後日で良いと言われたとか、クビにされたことに怒って返却さえせずに此处にやって来たとか…後者の方が確率は高そうですね」

「うーん、そうかもしれませんね」

と、貴京と女性が2人して悩んでいると。

「失礼する！！通報を受けてやってきた！怪我人はいないか！！」

入り口から響いたそんな言葉と共に、3人の衛兵が宿の中へと入って来た。どうやら、野次馬の誰かが衛兵に通報したらしい。流石に人に向けて剣を抜こうとした男だ、貴京自身もそのままにしておく気は無かったので、手間が省けたと思って衛兵を呼び込む。

「剣を抜こうとしたのを力ずくで止めたのですが、その結果暴れようとしたので少々無理矢理取り押さえました。気絶しているだけです、しばらくは胸に痛みが残るかもしれませんが」

そう言って床に倒れ伏している中年男を指差す。

「む、成程、やはりこいつが原因か　いや、事態の収束、感謝する。実に面目ないことなのだが、この男、衛兵を今朝クビになつてな。その時に装備を返却せずに飛び出して行ったから、搜索していたところなんだ……まさかこんな事件を起こすとは……貴殿がいなければ今頃どうなっていたか分からん、本当に感謝する」

隊長らしき衛兵がそう言つて頭を下げ、後ろに控えていた2人の衛兵も同じく頭を下げる。

「いえいえ、できることをやつたまでです。私に対する感謝の言葉はいりません。ただ、こちらの女性、その男に殺されるかもしれなかった女性です。彼女に対する謝罪の言葉ぐらいは要求したいですね」

貴京がはつきりした口調でそう告げると、隊長らしき衛兵がハツとした顔で女性に頭を下げる。

「私達の不祥事で怖い思いをさせてしまったようだ、誠に申し訳ない！心から謝罪する！」

「え、あと、いえ、私は大丈夫でしたし」

大の男3人に頭を下げられ流石に困惑する女性。あたふたしたあげく、貴京に助けを求める様な視線を送ってきた。

「まあ、今回は特に大きな問題は無かつたことですし、このような事がもう起こらないよう、宜しく願ひします」

女性が若干涙目だった上に、そろそろ疲れて来た貴京は、事態を完全に終わらせるべく衛兵に言葉を掛ける。

「ああ、全力で再発防止に努めよう。本当に貴殿には感謝する。ついでには、後日改めて礼をしたいので、できれば住所を教えてもらいたいのだが」

「あー、俺は旅の者でして、この街に家は無いですよ」

「む、そうか……それなら、うーむ」

貴京の言葉に、真剣に悩み始める衛兵。そこまですて改めての礼を貰うつもりが無かった貴京は、遠慮する旨を告げようとしたのだが、

「あの、それなら、この宿に宿泊されませんか？」

「え？」

それよりも先に、女性がそんな言葉を発したのだった。

第8話『宿泊先決定!!』

「命を助けて貰った恩もありますし、無償で宿泊して貰って構いません。それとも、迷惑、でしょうか？」

「え、いや」

上目遣いでそう聞いてくる彼女の瞳は微かに潤んでいるように見えて、こんな時何故女性は此処まで断りづらい表情をするんだー!!と、断るつもりも無いのに貴京は無意味に葛藤する。

「おお、それは良いですな、それならこちらもお礼がしやすい!!」

「そうですよね、あの、どうでしょうか」

衛兵の言葉もあり、女性がさらに一歩踏み出してくる。

「まあ、こちらとしてはまだ宿も決まってませんし、嬉しい限りですが……」

こうなると、貴京の返答が拒絶な訳が無かった。そもそも断る理由が無いし、もし何かしら理由があったとしても、大したことじゃなければ無理を押し通しても泊まることにしていただろう。

だって男だから、美人の頼みはそうそう断れるものではないのだから。
うん。

そうやって、心の中で誰にともなく言い訳する貴京であった。

「それでは、あまり大層な物は用意できないかもしれませんが、また後日お礼に伺わせてもらいます」

「いえいえ、お礼を頂けるだけでもありがたいですから」

「できる限りのお礼をさせていただきます。それでは、失礼しました」

そう言つて頭を下げ、3人の衛兵は元衛兵の中年男を担いで帰つて行つた。

衛兵が来た辺りから野次馬は散り始めていたため、今ではもう食堂は物が少し散乱している以外普通に見える。元々この普通を知らないのも、あくまで見えるだけだが。

「あの、本当にありがとうございます」

と、衛兵たちが去つて行つた方をなんとなく眺めていた貴京の背中に、再び女性の感謝の言葉が掛かる。

「いえいえ、そう何度も頭を下げないで下さい。こっちの方が申し訳なくなります」

「でも……」

「宿にも泊めてくれるのでしょうか？それだけでもお礼は十分どころか多すぎます」

この宿、外装も悪くは無かったが、内装はさらに見事だった。一般的な宿に勝るのは勿論、高級宿と言っても過言では無さそうな内装である。そんな所に泊まれるというのだ、それだけでお礼は十分、貴京としてはむしろ多過ぎる位だ。

しかし、無償で泊まる気は無い。アリシアのために2部屋取らなければいけないし。

「ただ、一つお願いを良いでしょうか？」

「为什么呢？」

「できれば二部屋取りたいのですが、あ、宿泊料金はちゃんと二部屋分払います」

早速その旨を告げる貴京だが、彼女の返答は予想していたパターンの中でも困るものであった。

「あ、はい。二部屋ですね、構いませんよ。それと宿泊料金は二部屋とも無償で結構ですよ」

「いやいや！流石にそれは」

無償で良いと言われる可能性が高いとは思っていたが、この返答はやはり困る。そもそも元は一部屋の提案で、それでさえ貴京としては多過ぎるという思いを抱いていたのだ、二部屋無償は明らかに自

らの行いと礼が釣り合っていない。

せめて無償は一部屋だけにして貰おうと口を開く貴京だが

「いいえ、二部屋とも無償で結構です。これは私からのお礼なんです。助けて貰ったお礼も満足にできない人に私をしないで下さい」

「う……ぐっ……」

こういわれると、返す言葉が無くなる。しばし唸ったが、やはり返す言葉が見つかることも無く。

「分かり、ました。ご厚意に甘えさせてもらいます」

そう言っつてついに折れた貴京に、女性はニコリと笑みを浮かべた。

「はい、ごゆっくり宿泊して行って下さい。そうだ、自己紹介がまだでしたね。私は『セレナ・アーベルム』、この宿の主をしています」

「あ、俺の名前は『御神貴京』、ここ風に言つと『キキヨウ・ミカミ』ですね。連れと一緒に旅をしています」

深い礼を伴った丁寧な自己紹介に、貴京も慌てて頭を下げ、自己紹介を返す。

ちなみに名前を言う前の一瞬の間は、漢字の名前で大丈夫か、シルヴィアから貰った資料にあった『漢字圏も存在するため偽名を使わずともOK』の記述を思い出すための沈黙である。

「ミカミ様ですね。成程、もう1人はそのお連れ様の部屋でしたか」

「ええ、今はちょっと別行動中なんですけどね。それと、俺のことは貴京で良いですよ」

そう言うで一瞬躊躇ったようなセレナだが、すぐに頷き言葉を返す。

「分かりました、キキヨウ様。私のこともセレナと気軽に呼び下さい。敬語も必要ありません」

「ん、セレナ、分かった。俺にも別に敬語は使わなくて　って、それは職業上仕方ないか」

「はい、お客様に敬語を使うのは基本中の基本です」

セレナはそう言ってニッコリ微笑むと、流れるような動作で貴京を宿の奥に案内しようとする。

「それでは、お部屋の方にご案内を　」

「あ、まだ良いよ。連れを迎えに行かないといけないし。片づけとかもあるでしょ？」

しかし、それを遮る貴京。先程の争いによつて、食堂には少なからず物が散乱しているし、アリシアには宿を見つけたら魔法による念話で場所を連絡する手はずになっているのだ。

「分かりました。では、いつでも声をおかけください」

「了解」

そう言って、ひとまずセレナに背を向けて宿の外に出る貴京。

「さてと、アリシアに連絡を」

「その必要はありませんよ、貴京様」

と、頭の中に念話の魔術式を思い浮かべようとした貴京の耳に入った声は、聞きなれたソプラノボイス。透き通るようなその声の聞こえた方を向くと、そこにいたのは貴京の予想通り

「おお、アリシア、良くこの場所を見つけられたな？」

貴京のその言葉に、微かな苦笑を浮かべるアリシアだった。

第9話『合流と、大切な任務』

「もしかして貴京様、その言葉本気で言ってます？」

「ん？」

微かに苦笑しながらのアリシアの言葉に、本気で先程の言葉と言った貴京は本気で首を傾げる。それを見て苦笑を呆れた様な笑いに変えたアリシアは、今しがた貴京が出てきた宿屋を指しながら言葉を紡ぐ。

「『黒髪黒目で漆黒の礼服を纏った男性が、中年の衛兵と宿屋で争いを繰り広げている』つい先ほどすれ違った人が話していたのが偶然聞こえました」

その言葉に、自らの体に目を落とす貴京。

漆黒のスーツに、漆黒のロングコート、靴も漆黒の革靴。バリバリの黒髪黒目。

「成程、俺か」

納得である。

「そうです、貴方です。全く、急いで駆け付けて来たんですけど、何があっただんですか？」

「何、人助けしただけだ。そう心配そうな顔をするな」

若干心配そうなアリシアに、貴京はヒラヒラと手を振って返答する。

「まあ、それならいいんですけど……」

「しかし、ついさっきの出来事だぞ？もう広まってるのか？」

貴京が騒ぎを聞きつけて宿屋に入ってから数えても、まだ10分経っていない、噂が広まるにはあまりに早過ぎると思ったのだが

「いえ、別に噂の様に広まっている訳ではありません。偶然聞いただけです。多分私がすれ違ったのが野次馬の誰かだったのでしょう」

「ふむ、成程なあ」

しかし、この人通りの多い観光都市で、ただすれ違っただけの人の言葉をそこまで正確に聞き取るとは、本当に自分には真似できない諜報能力の高さだと貴京が舌を巻く。

「どうかしましたか？」

「いや、何でも無い」

感心するあまり凝視し過ぎたようだ、首を傾げるアリシアは非常に可愛らしいが、今はまず報告を聞かねばなるまい。

「とりあえず、この宿に部屋を2部屋取った。部屋に行って報告を聞くとしよう」

「畏まりました、貴京様」

部下モードに入ったアリシアの了承の返事を聞くと、貴京は早速踵を返し、アリシアを引き連れて宿の中に戻る。すると、先程まで物が散乱していた一角は既に片付けが終わっており、セレナの姿もカウンスターにあった。

「片付けはやっ……」

「？　　どうかしましたか？」

「いや、何でも無い」

自分の周りの女性は色んな方面でスペックが高過ぎないか？という疑問を抱いた貴京だが、とりあえず保留。カウンスターで何やら書類整理をしているセレナの元へ歩み寄る。

「セレナ」

「はい？あ、キキヨウ様　えっと、そちらがお連れ様ですか？」

貴京が声を掛けるとすぐに顔を上げ、貴京を見た後アリシアの方を見るセレナ。

「ああ、連れの　」

「アリシア・フォン・クラッツベルンです。アリシアで構いません」

「あ、ご丁寧にどうも、私はセレナ・アーベルムと申します。セレナとお呼び下さい、後、敬語も必要ありません」

「いえ、これが素の口調なんです」

「あ、そうでしたか、すいません」

「いえいえ、何やら貴京がやらかしたみたいで、申し訳ありません」

「いえいえ！！むしろキキヨウ様には」

と、アリシアとセレナ、いきなり会話に華を咲かせ始める女性2人。

「……………」

当然貴京はついて行けず、無言である。楽しそうに話しているので、普段ならそつとしておくのだが、今は仕事が先である。

「ゴホン」

「あ、御免なさい……………」

「も、申し訳ありません……………」

貴京がわざとらしく咳払いすると、ばつが悪そうに目を伏せて謝るアリシアと、本当に申し訳なさそうに頭を下げるセレナ。貴京が逆に悶えそうになるほど申し訳なくなったのは言わずもがなである。

だが、アリシアの情報は、次元の平和を守るという大切な仕事の礎となるもの。できるだけ早く聞いておく必要があるのだ。

「いや、楽しそうなところこちらこそ申し訳ない。だけど今日は時間が無いので、部屋に案内して貰えますか？」

心を鬼に。外面は平静を保っているが、内面では2人、特にセレナに対する罪悪感で涙目を通り越して号泣である。

「はい、今案内します！」

急いでカウンターから出てきたセレナに案内されて、2人は2階にある部屋にそれぞれ案内された。

「こちらの部屋で良かったですか？」

「ええ、アリシアとも隣同士ですし、部屋自体も文句のつけどころがありません」

セレナの最終確認にそう答える貴京、アリシアも隣でうんうん頷いている。

「ありがとうございます。それでは、私は基本的にカウンターにいますので、何かありましたらいつでもお呼び下さい」

「了解です」

「また後でさっきの続き、話しましょうね」

「はい！」

セレナは笑顔でお辞儀をすると、小走りで1階へと戻って行った。

「さてと、それじゃあ、俺の部屋で報告を聞こうか」

「畏まりました」

セレナの姿が完全に見えなくなると、2人の雰囲気が変わる。次元の平和を守るといふ大切な任務を帯びた2人は、静かに、貴京が宿泊する部屋へと入って行った。

第10話『情報整理とプラン決定!!』(前書き)

色々詰め込み回

第10話『情報整理とプラン決定!!』

「
『シャングリラ不可侵の聖域』」

アリシアが部屋に入り扉を閉めた事を確認した貴京が、ボソリとそう呟く。それと同時に、鈴の音の様な透き通った音が部屋の中に響き渡った。張られたのは外界からのありとあらゆる干渉を遮断する聖域生成結界。世界の主神クラスでさえ解けるかどうか怪しい程高度で洗練されたその結界は、一見するとやり過ぎに思える。

しかし、全次元平和管理局の存在はどの次元、どの世界であろうと、特殊な例外を除き絶対的に秘匿。

これから聞くのはこの世界の情報だが、勿論その情報を得て今回の任務についての話しもする必要がある。話を聞かれた程度で全次元平和管理局の存在が公になる可能性は非常に低い、けれど用心に用心を重ね、なんとしても存在を秘匿する。

それは全次元平和管理局に所属する全局員に課された絶対の義務。

それを踏まえると、今回の結界はそれ相応のものなのである。

「よし、これで情報は絶対に外に漏れないはずだ」

何の苦勞も無いように軽く告げる貴京だが、一般の局員はこの存在秘匿の義務を守るため、数十分を掛けることもある。中には存在秘匿の術式を構築させるためだけに、任務に魔術師を同行させる局員さえいるのだ。貴京の手際はまさに見事と言う他なく、こういったところで局でも数少ないオーバーSランク保持者としての風格が漂う。

「それじゃあ、報告を聞こうか」

「畏まりました」

準備は万端。貴京が椅子に腰かけ、その正面にアリシアが立つ。完璧な上司と部下の関係図で、アリシアの報告は始まった。

「まず魔王についてですが、既に新たな魔王が生まれていることは街の住人でも知っていることのようにです。この世界で魔王が生まれることは珍しいことではなく、有史以前からの出来事のようにです。勇者という概念は存在せず、討伐は様々な国々が連合を組み、討伐隊を編成して行うそうです。また、こちらは後ほど別に説明しますが、この世界には冒険者ギルドという組織が存在し、その冒険者ギルドからも精鋭が選ばれ討伐に参加するとか。先代魔王が討伐されたのは30年前。基本的に魔王は討伐されてから50年の周期で新たな魔王が誕生するらしいので、今回の魔王は20年近く速い周期での誕生となります。国も街の人々も、この点は疑問に思っているようです。今回の魔王の力に疑問を持っている者は、少なくとも街の住人達の中にはいないようでした。というよりも、まだ魔王が誕生したばかりでなんの情報も無いそうです。魔王の討伐隊は未だ編成されておらず、通例どおりならばあと半年はしないと討伐隊は出発しないのではないかということでした。通常の魔王の強さは、局

員のランクに換算するとAランク相当と見られます。魔王については以上です」

「ふむ……冒険者ギルドについては？」

「はい、冒険者ギルドとは、モンスターの討伐や要人の護衛などの依頼を受けて賃金を稼ぐ職業『冒険者』になるために絶対に加入しなければならぬ組織だそうです。特別な試験などは無く、登録さえすれば冒険者になれるそうですが、例えば何があるかと、たとえばモンスターに重傷を負わされようと基本自己責任だそうです。なお、冒険者にはランクが存在し、こちらは一定条件を満たすと受験可能となる昇格試験を受け合格できなければ昇格は不可、受けられる依頼にも冒険者ランクに応じたランク付けがされているようで、どちらも最下位が『G』、そこから『F』、『E』と上がって行き、『A』、『S』、『SS』と来て、最高位が『SSS』だそうです。表記は局のランク付けと同じですね。冒険者ギルドは国の垣根を越えて存在しており、登録者数は1億人を越えるとか、資料によるとアルカディアの全人口が約5億人ですから、相当の数ですね。現在最高位である『SSSランク』の保持者は100人ほどで、強さは局員のランクに換算するとAランク相当、つまり通常の魔王と同程度です。そのため、冒険者ギルドからSSSランク保有の冒険者が少なからず派遣されるのが常である魔王討伐において、苦戦を強いられたという記録は大して残っていないようです。私が調べた情報は以上です」

「成程、御苦労」

アリシアの情報を聞き、貴京は今後のプランを固めて行く。

場を沈黙が支配すること約1分。

「よし、今後のプランが決まった」

貴京はそう言うと、自信有り気な笑みを浮かべながら今後のプランについてアリシアに説明を始める。

「まず、この世界の住人が魔王討伐に動き出すのは、通例どおりなら半年後らしいから、それまでには魔王を討伐することにしよう。俺らが出向く必要があるほどの力を持った魔王だ、この世界にも優秀な人材は結構いるようだけど、恐らく勝てないだろう。この世界の住人と魔王を戦わせて犠牲を出すのは避けたい」

「はい」

「だけれど、今すぐに魔王を討伐しに行く訳じゃない。別に今すぐ行っても俺なら勝てると思うし、むしろ今行った方が魔王も力を御しきれてないだろうから勝ちやすいだろう。だけど、それはしない、何故だかわかるか？」

「シルヴィア様に提示された追加条件、サブクエスト『優秀な人材の確保』を達成するためですね？」

「その通り、流石アリシアだ。1年という長い任務達成期限もそのためのものだろう。」

だからまずは、冒険者ギルドに俺らも登録して、この世界での強者を探す。そして目ばしい人材をある程度見つけたら、その者たちと

共に魔王を討伐。その後、できることならその者たちのスカウトを成功させ、局へと連れ帰る。これが俺が考えたプランだ、どうだ？」

「良いプランだと思います。私は貴京様に賛成です」

アリシアの賛成を受け、貴京は大きく頷くと椅子から立ち上がり笑みを浮かべる。

「よっしゃ！決定だ！！」

シャリイン

貴京の大声での宣言と共に、ガラスが砕ける様な音が響き結界が解除された。

「うーん！」

話し合いを行っていたのはたった数分なのに、さぞ疲れたように伸びをする貴京。つくづく上役に向かない男である。

「しかし……」

と、一通り体を伸ばした貴京が、ふと思った様に口を開く。

「？」

「アリシアは本当に凄いな、あの短時間でよくあそこまで調べられ

「たもんだ」

現時点で調べるべき項目は全て網羅する情報量、少なくとも自分ではあの半分も情報を集められなかっただろうと貴京は改めて舌を巻き、感心したように頷く。

それに対し、一瞬キョトンとした表情を見せたアリシアは、

「大したことではありません、それが私の仕事ですから」

そう言いつつも、少し恥^づかしそうにはにかむのだった。

第10話『情報整理とプラン決定!!』（後書き）

今回は本当に色々詰め込んだ回でした。

時間が無くて急いで書いたので、分かりづらい箇所があったかも？
もしそういう箇所がありましたら、感想の方で教えていただけると
嬉しいです、修正します。

そして今回はプロローグ合わせると11話目ですが、表記で見れば
10話目の節目。

といっても、何か特別な変化があったりする訳でも無いのですが。

第11話『腹が減ってはなんとやら』

「さてとそれじゃあ、早速冒険者ギルドに登録　しに行く前に、飯を食おう、飯。腹が減ってはなんとやらだ」

「なんとやらですね」

現在アルカディアの時刻はちょうどお昼時、全次元平和管理局本局での時刻も昼前だったため、お腹が空くのも無理は無い。

「食堂にレッツゴー」

「レッツゴー」

昼食を取ることに決めた貴京とアリシアは、何やらとてつもなく軽いノリで部屋を出る。2人が向かった先、宿屋の1階に併設された食堂は、先程貴京と中年の元衛兵が小競合いを繰り広げたのが嘘の様な賑わいを見せていた。お昼時だということを考えてもかなりの盛況ぶりである。

「あ、キキヨウ様、アリシア様」

その中を誰ともぶつからず、さらには両手に料理の載ったプレートを持ってスイスイと移動していたセレナが、人混みの中から2人の姿を見つけて声を掛けてくる。

「良く見つけられたなあ」

まさに大盛況な食堂、その中を何の苦もなく移動する姿、そして自

分たちを発見する目の良さに、貴京が素直に驚きを表す。

「いえ、お2人は目立ちますから、あ、良い意味ですよ?」

全身黒ずくめの長身の男に、煌めく様な金髪を腰まで伸ばした絶世の美女、これほど目立つ組み合わせも滅多に無いだろう。

「んー?そうか?」

「自分たちでは分かりかねますね」

2人して仲良く首を傾げる貴京とアリシアを見て、セレナはクスクスと笑いながら空いている席を示す。

「あの席が空いているので、あちらにどうぞ。それと、宿泊者の方は無料で料理が食べられるので是非ご利用ください、会計の時に宿泊されている部屋の鍵を見せてもらえれば結構です」

「ん、了解。というか、セレナは宿の主なのに給仕もやるんだな」

「小さな宿ですから、従業員は私含めて4人しかいないんです。でも、楽しいですよ?」

「ああ確かに、楽しそうだ」

2階から下りた直後の少しの間しか見ていないが、人でごった返す食堂の中、あっちへこっちへと忙しく動き回るセレナは、とても生き生きとして見えた。

「おーい、料理はまだかー？」

「あ、はい！今持って行きます！！ すいません、仕事しないと」

「ああ、引きとめてすまなかった。頑張ってくれ」

「はい、ありがとうございます！！お2人もゆっくりして行っ下さい」

そう言うと、すぐさま踵を返して給仕を再開するセレナ。先程までと変わらず、スイスイと淀みないその動きは見事なものだ。

「本当に凄いなあ」

「ええ、才能がありますね 剣術とかの」

「だな」

何やら非常に飛躍した2人の会話に、偶然後ろを通りかかった男性が思わず足を止め、さらにその表情は何やら凄く変な顔になっていたのだが、既にセレナに示された席へと足を進めていた2人が振り向くことは無かった 気付かないふりをしていただけかもしれないが。

ちなみに

「うつわ何だこれ滅茶苦茶うめえ!!」

「この盛況ぶりも領けますね」

料理は宿泊客以外の人が大勢食事しに来るのも領ける美味さだった。

「うめええええええええ!!」

「貴京様うるさいです」

第12話『比較的大きな冒険者ギルド』

「「ごちそうさまでした」」

貴京とアリシア、2人で一緒に手を合わせて礼をする。少々多めに頼んでしまったかと最初は思っていた貴京だったが、想像以上の美味しさに容易く完食である。

「いやー、本当に美味しかったな」

「そうですね、期待以上でした」

2人が満足そうに、コップに残っていたお茶を飲んでいると、

「満足していただけたみたいですね」

そう言つて、セレナが歩み寄ってきて食器を下げ始めた。

「ええ、本当に美味しかったです。ご馳走さまでした」

「ありがとうございます。料理長の腕は折り紙つきですからね」

自分のことのように誇らしげなセレナに、貴京は優しげな笑みを浮かべる。

「　　っと、この後用事があるんです。ちょっと外出しますね」

「あ、分かりました。お2人が宿泊客なのは分かっていますので、会計は結構ですよ」

「ありがとうございます、それでは行ってきます」

「行ってきます」

「行つてらっしゃい、2人共、お気をつけて！」

こうしてセレナに見送られ、貴京とアリシアは一路冒険者ギルドへと向かった。

「さて、普通に出てきたわけだが、この街に冒険者ギルドってあるのか？」

キョトンとした顔でアリシアに聞く貴京、何も言つてこないのだから普通のだろうが、一応聞きたくなるのが人の心理である。

「ええ、フォルアスには比較的大きな冒険者ギルドがあるそうですよ」

「比較的大きな？」

気になるワードに、キョトンとした顔でさらに首を傾げる貴京。

「はい、フォルアスは観光都市として有名なので、要人や貴族の護

衛任務がかなり豊富なようです。さらに、私達が最初に降り立った『宵闇の森』がありましたよね？」

「ああ、あの狼がいた森か」

「はい。私達が降り立った場所は比較的街に近い場所でしたが、奥地に行けばかなり強力なモンスターや、希少な素材、薬草なども存在しているようです。それらの要因が合わさり、冒険者ギルドも街の大きさに見合わぬほどまで巨大化したようです。」

「成程、様々な依頼が豊富な地域ということか」

「そういうことです」

非常に分かりやすいアリシアの説明に、貴京がふむふむ頷く。

「しかし、それは好都合だな。これなら意外と速く目ぼしい人材を見つけられるかもしれん」

「そうですね」

冒険者ギルドは本来、冒険者となって生計を立てようとする人々が登録する組織だが、貴京とアリシアは全次元平和管理局に既に勤務している訳で、しっかり給与も貰っている（ちなみに月給制）。

そんな2人が冒険者ギルドに登録する目的、それは生計を立てることではなく、実力ある冒険者を見つけ、仲間に加えることである。そのため、大きな冒険者ギルドであれば、実力のある冒険者も見つけやすくなると考えたのだ。

「貴京様、あれが冒険者ギルドの建物です」

「お？」

と、色々話している間に冒険者ギルドの建物に着いたようである。

外観は 宿屋などが近いだろうか。大きな玄関に、掲げられた『冒険者ギルドフォルアス支部』の看板。宿屋と違う点は、武装した人々がひっきりなしに出たり入ったりしている点や、無駄な装飾が無いところか。

「ほうほう……さてと、それじゃあ行きますか」

「はい、行きましょう」

こうして、2人は全く緊張した様子などなく、悠々と冒険者ギルドへ足を踏み入れた。

「ふむ、これは意外と……」

「綺麗ですね」

2人が冒険者ギルドへと足を踏み入れて最初に抱いた感想、それは『綺麗』というものであった。勿論、床には土がついていたり、所

々汚れが染み付いたりするのだが、全体的に清涼な空気で満たされており、熱気や悪臭は全く無い。

「ちょっと想像、というか経験からの予測とは違ったな」

そう言う貴京、そしてその部下のアリシア。この2人、実は過去にも冒険者ギルドに非常に似た組織に加入したことがあるのだ。その時は別の星での任務で、今回と同じく任務上必要になったため加入したのだが、今回とは違い、建物内には酒場も併設されており熱気と悪臭が満ちていた。

職員はこんな中で良く一日仕事が出来るものだ、と、貴京とアリシアは2人で心底感心したものである。

さり気なく、今回もそんな感じなのではないかと予測していた貴京だったが、その予測は良い意味で裏切られた。今回の建物は本当に冒険者の業務に係る施設だけが集まっていたのである

まず目につくのは、入口から入って目の前にある、役場の様に並んだ受付。恐らくそこで依頼の申請や完了報告をするのだろう。左手にあるのは数組の丸テーブルと椅子。休憩スペースか、仲間でも募集するスペースだろうか？そして右手にあるのは巨大な掲示板。所狭しと張られている紙を見るに、恐らく依頼書が張ってあるのだろう。

右手の掲示板で依頼を選び、中央の受付で申請、複数人で取り組む依頼の場合は、左手のテーブルや椅子が置いてあるスペースで仲間募集　といったところだろうか。

貴京はそう予想をしつつ、中央の受付へと歩を進める。

「まずは、冒険者登録だよな？」

「その通りです。貴京様」

相変わらず完璧なサポートをしてくれるアリシアに笑みを見せながら、貴京は適当な受付の前に立った。

第13話『冒険者登録』

「こんにちは、ようこそ冒険者ギルドへ」

貴京が前に立つと、その受付を受け持っている女性職員が完璧な営業スマイルで頭を下げた。職業上、貴京も営業スマイルは一応できるのだが、どうしても好きになれないのが本音である。

「こんにちは、あの、冒険者登録をしたいのですが」

「はい、初めてのお客様ですね」

女性職員はそう言つと、淀み無い動きでカウンターの下を覗きこみ、そこから大量の書類を取りだす。

「うわ……」

局の仕事でも書類作成や整理を非常に苦手とする貴京があからさまに嫌そうな声を出す、書類作成や整理をそこまで苦手としない者でも顔を顰めそうな量である。

「ふふつ、手続きに必要なのはほんの数枚で、後は全部社会に出る上で当然のことや、冒険者としての心得などが書かれた注意書きなので、登録が終わってからゆっくり読んでもらえれば構いませんよ。というか読む必要さえ無い書類が大半です」

職員がそんなことを言っているのかと思うようなことを笑顔で言う女性職員だが、貴京としては有難い言葉な上に、気さくそうな職員で何よりである。

「それなら良かった……あ、そうだ。連れも一緒に登録したいんですが」

と、自分だけでなくアリシアも冒険者登録をする必要があったのをお願い出し、一遍に登録を済ませられないかと女性職員に持ち掛けるみる。

「あ、それでしたら一緒にどうぞ、ええと……書類はこちらです」

カウンターの下から再び出てくる大量の書類。どうやら一緒に登録しても、書類は1人1組のようだ。

「それでは、登録方法のご説明をしたいと思います」

キリツと表情を引き締め、女性職員が書類を指差して説明を始める。

「まず、こちらに名前と、性別、年齢を。はい、次はこちらに居住地を、定住してらっしゃらない場合は、現在拠点とされている場所をお書き下さい。尚、拠点を変更なさった場合はその土地に在ります冒険者ギルドで、拠点変更手続きを行ってください。はい、次はこちらに得意とする武器などを」

そんな感じで女性職員に説明を受け、せっせと書類に記入すること約15分

「はい、それでは最後に、こちらに拇印を はい、これで冒険者登録に必要な書類は出来あがりしました。お疲れ様です」

「うあー、疲れた……」

「貴京様、この程度疲れるなんて情けなさ過ぎます」

書類作成が大の苦手である貴京はかなり疲れた様子だが、ようやく冒険者登録に必要な書類の作成が完了した。ちなみに、貴京に良く書類整理を丸投げされているアリシアは全く疲れた様子は無い。なんだかんたやっぱり出来る部下である。

「それでは次に、冒険者について最低限知っておくべきことや、注意点などを説明させていただきます」

書類作成が終わると、次は冒険者についての説明が始まる。

「まず、後ほどお渡します『冒険者証明書』は冒険者の身分証です。街の関所などでも身分証として使えますので、是非ご活用ください。尚、紛失、破損した場合は再発行が可能です。再発行には銀貨1枚が必要なので気を付けてください」

「成程、了解しました」

ちなみに この世界、アルカディアの通貨は『銅貨』、『銀貨』、『金貨』、『白金貨』の全4種類で、一般的な家庭の平均年収が金貨1枚である。

「次に冒険者のランク、『冒険者ランク』についてです。最低ランクは『G』、そこから『F』、『E』といった感じに上がって行って、『A』、『S』、『SS』、『SSS』、最高ランクが『SSS』です」

「ふむふむ」

この辺りはアリシアの説明通り。

「登録したてなので、貴方達は当然Gランクからのスタートですが、Gランクの依頼は猫探しとか買い物の荷物持ちとかばかりなので、戦闘経験がある方ならすぐにDランク位までならいけるかと……というかいくことをお勧めします」

猫探しや買い物の荷物持ち……冒険者？少なくとも猫探しや買い物の荷物持ちを冒険と言わないことだけは確かだなと、頷く貴京だった。

「えーと、今『Gランクの依頼』という言葉を使いましたが、依頼の方にも冒険者ランクと同じく、『依頼達成難易度』というランクが付いています。冒険者ランクと同じく、『G』が最下位、『SS』が最高位です。自らの冒険者ランクより依頼達成難易度が下の依頼はいくらでも受けることが可能ですが、上は2ランク上までと規定されています。つまり、Dランクの冒険者なら、Bランクの依頼まで受けることが出来るわけですね」

「成程成程」

つまりGランクの自分達はEランクの依頼まで受けられるということかと、貴京はしっかり記憶に留める。

「では、最後にランクアップの方法について説明させていただきます。ランクアップの方法は大きく分けて二つ、まず一つ目『何かしら大きな功績を立てる』これは非常に稀で、たとえば滞在していた街が偶然強大な魔物に襲われ、それを討伐した場合などですね。も

う一つ、こちらが一般的な方法なのですが、『条件を満たした上で昇格試験を受け合格する』この二つですね」

「成程、それで、その条件というのは？」

「はい、条件というのは、『依頼達成ポイント』の累計です。依頼達成ポイントというのは、依頼を達成することにより得られるポイントで、自らの冒険者ランクと同じ依頼達成難易度の依頼なら『1』、自らの冒険者ランクより1ランク上の依頼達成難易度の依頼なら『5』、そして2ランク上の依頼なら『10』のポイントが得られます。『Gランク』から『Fランク』へのランクアップだろうと、『SSランク』から『SSSランク』へのランクアップだろうと関係なく、ランクアップに必要な依頼達成ポイントは全ランク共通で『50ポイント』です」

「つまり、ランクアップの条件を満たすには、最低でも5回依頼を成功させなければならないわけですか」

「そう言うことで御座います」

「ふーむ……」

今の貴京とアリシアの目標は、高ランク、それできればSSSランクの冒険者を仲間に加え、共に魔王を討伐することだ。仲間になって貰い、さらに相当な脅威である魔王を共に討伐しようというのだ、貴京とアリシア自身もそれ相応のランクを持たねば、相手にさえして貰えないだろう。

貴京が目標に設定している期限は半年、できる限り早くランクを上げたいが、先程女性職員が言った通り、大きな功績なんてそうそう

立てられるものではない。こればかりは、せめて2ランク上のクエストばかりを受けて地道に時間短縮しつつやるしかないかと、貴京は溜息を吐く。

「？ 何か疑問がありましたか？」

「あ、いえ、気にしないで下さい。予想以上にランク上げに時間が掛かりそうだったので」

首を傾げる女性職員に、貴京は溜息を吐くのは露骨過ぎたかと慌てて取り繕おうとしたのだが、その時思わず思っていたことを正直に言っってしまった、取り繕えて無いじゃないか！！と自分で自分に突っ込んでみたりしていると

「んー、冒険者登録したての貴方達には正直お勧めしませんけれど、どうしても速くランクを上げたいというのなら、ギルド主催の闘技大会に参加してみてはいかがですか？」

女性職員の口から出たのはそんな言葉。

「闘技大会？」

「はい、開催は1か月後、開催地は此処『フォルアス』。優勝賞品は

『SSSランク』へのランクアップです」

「なんですと!？」

い。
思わず本音を言ってしまったのは普通に正解だったかもしれない。

女性職員の話しに全力で食い付きながら、貴京はそんなことを思った。

第14話『闘技大会参加申し込みと来訪者』

「マジですか！！本当ですか！！ガチですか！！」

普段は割とクールなキャラであるにもかかわらず、そのキャラをぶち壊してまで女性職員の話しにくくい食い付く貴京。

「え、ええ、本当ですから、少し落ち着いて下さい」

常に営業スマイルを浮かべていた女性職員も、流石に苦笑いである。

「あ、すいません」

しかし、これは相当魅力的な話である。

それだけの賞品が出るのなら、アルカディアの強者もそれなりに出場するのだろうが、貴京は自他共に認める全次元最強クラスの強者である。いかにこの世界で強者だろうと、貴京からしたら赤子同然。赤子の手を捻るとはまさにこのことである！！

「あのー、説明してもよろしいでしょうか？」

「貴京様、落ち着いて下さい」

「む、申し訳ない」

色々暴走気味である。

「えーと、闘技大会とはその名の通り、『己の持ち得る戦闘技術の

全てを駆使して相手と戦い、優勝を目指せ！』って大会です。ちなみにこれ公式キャッチコピーです」

非常に分かりやすいが何の捻りも無いキャッチコピーである、それで良いのか。

「参加資格は冒険者であることのただ一点。性別、年齢、戦闘方法は問いません。

剣術で攻めてもよし、魔法で攻めてもよし、中には召喚士の方なんかもいますね。あ、召喚士については言わなくてもご存知ですか？」

「ええ、知ってます」

口ぶりからしてこの世界では結構希少な人材なのだろうか？と微かに首を傾げる貴京。

ちなみに、そんな貴京の知り合いの召喚士は、笑顔で神獣や幻獣を湯水のように召喚して来るとんでも存在である。過去に一度戦った時には、勝ちしたが相手のいる場所に辿りつくまでに1週間費やしたとか何とか。

「開催はぴったり1カ月後ですので、もし参加されるのでしたら準備を整えておくことをお勧めいたします。参加申し込みは冒険者ギルドで可能ですが……」

「今します」

即答する貴京に、女性職員は再びの苦笑い。

「あの、本当に宜しいのですか？参加される中にはSSランクの冒

険者さんなんかもいます。並の技量では到底太刀打ちできないと思われるんですが……」

至極尤もな女性の言葉、冒険者登録したての冒険者がSSランクの冒険者を相手にして勝利するなど、通常ならまず思い付かないし、その通り、まず不可能である。

しかし、

「大丈夫です、俺、強いですから」

通常の初心者冒険者とはまさに格が違う貴京は、不敵な笑顔を浮かべるのだった。

「それでは、またのお越しをお待ちしております」

「ありがとうございます」

「ありがとうございます」

深々と頭を下げる女性職員に、頭を下げ返して踵を返す貴京とアリシア。

その後、闘技大会の参加申し込みを済ませた2人は、冒険者に関する

る説明の残りを受け、冒険者証明証を受け取り、今日の所は依頼を受けずに冒険者ギルドを後にした。

ちなみに準優勝の賞品は『SSランク』へのランクアップらしいので、アリシアと2人でワンツー狙いである。冒険者に関する説明の残りというのは、チームを組んで依頼を受けた場合の話しやらなんやらだった。

「いやー、楽しみだな、闘技大会」

「相変わらず、貴京様はそういった催しがお好きですね」

本当に楽しみといった様子で話す貴京に、出会ったところから変わらない主の姿に笑みを零すアリシア。

「殺し合いは好かんが、そういう力の競い合いは好きだな」

まだ何の力も持たない平凡な人間だった頃はそうでも無かったがと、貴京は遠い昔をふと思い出す。

「どうしたんですか？急に遠い目をして」

「いや、何でも無いさ」

「？変な貴京様」

「はっはっはっ」

そんな他愛もない会話をしつつ歩くこと数分。

「お、宿が見えてきた　　ん？」

遠くに宿の入り口が見えた所で貴京が立ち止り、宿の入り口を凝視する。

「どうかしましたか？　　あれは、衛兵？」

それを見て同じように宿の入り口を見たアリシアが、宿の入り口で何やらセレナと話している衛兵を見つけ首を傾げる。

「ああ、あの衛兵は確か　　いや、間違いなくあの人たちだな」

「あの人たち？」

「ああ、俺が伸した中年男の、上司らしき人だ」

そう、宿の入り口で今まさにセレナとの会話を終え、頭を下げて踵を返した衛兵は、まさに昨日、またお礼に来说と帰った衛兵だった。

「ちよつと急ぐぞ」

「畏まりました」

宿との距離は未だに100m以上あり、セレナと衛兵の姿を捉えられたのは貴京とアリシアの視力だからこそ。此処まで来ているのにこのまま帰られると、なんとも言えない残念な気持ちになるのは容易く予想できたので、呼び止めるため、貴京とアリシアは人の波を縫うようにして走りだした。

第15話『お礼と訓練と、さらには強者』

「待って下さい!!」

人混みの中を一陣の風のように駆け抜けること数秒、貴京とアリシアはその脚力であつという間に衛兵に追い付いた。帰ろうとしていた衛兵と、それを見送っていたセレナが貴京の声に反応して振り返る。

「あ、キキヨウ様、丁度良かったです」

「おお！お戻りになられましたか!!」

安堵したような表情を見せるセレナと、厳つい顔を綻ばせる衛兵。

「申し訳ない、ちょっと外出してました」

100m以上の距離をものの数秒で駆け抜けたというのに、貴京もアリシアも全く息を乱した様子は無く、貴京はすぐさま申し訳なさそうな表情で謝罪する。

「いやいや、我々がお礼をしようというんです、貴方が謝る必要はありませんよ」

衛兵のその言葉は至極尤もだが、こういう場合でもとりあえずの謝罪は社会人としての常識である。

「それですな、今日は昨日言った通り、お礼をしに参りました」
そう言つて衛兵が取りだしたのは、真新しい布製の袋。勿論、どこ

にでも売っている様な布製の袋が礼な訳は無く。

「少なくとも申し訳ないが、銀貨20枚です」

衛兵が袋の口を開くと、中に見えるのは銀色の輝き、衛兵の言葉通り銀貨である。

「いや、銀貨20枚って結構な量じゃ……」

一般的な平民の年収は金貨1枚、銀貨100枚で金貨1枚に相当することを考えると、銀貨20枚も中々の金額である。全次元平和管理局で非常に高額な年収を誇っていても、金銭感覚は全力で庶民な貴京は、思わず受け取るのを拒む。

されど当然、衛兵が「はいそうですか」と引つ込めるはずも無く。

「いやいや、貴方がいなければあの男は殺害事件を起こしていたかもしれないのです。そうなれば我々衛兵の社会的立場もただでは済みません。その辺りを考慮すると銀貨20枚程度ではお礼にならないほどです。どうか受け取ってください」

わざわざ一歩踏み出し、力説する衛兵。かなり顔が近い。

「う、うーん……まあ、そこまで言つのなら」

衛兵の言葉は筋も通っているし、貴京も一度はお礼を受け取ると言ったのだ。ここで渋っても仕方ないだろうと、衛兵が差し出していた布袋を受け取る。

それと同時に思うことが一つ。

「（今は正直金はいらないんだがなあ……）」

宿の宿泊料金がただになったり、衛兵からお礼で銀貨を貰ったり。アルカディアに来てからの貴京は金銭面で非常に運が良い。しかし、現在は任務中であり、申請さえすれば基本的に局から金銭の支給は受けられる。つまりこの世界では無一文になるうとやっていけるのである。

金銭面でツイているのは非常に良いことなのだが、なんとも微妙な気持ちの貴京であった。

「改めて、本当にありがとうございました。それでは、お礼をしに来ているのに忙しくて申し訳ないが、私は仕事があるのでこれで」

と、微妙な気持ちが顔にまで現れ、なんか変な顔になっていた貴京に衛兵は頭を下げると踵を返す。そこでふと、変な顔をしつつ突如舞い込んだお金の使い道を考えていた彼は、お金の使い道とは全く関係無いことを思いついた。

「あの！」

既に歩き出していた衛兵を急いで呼び止める貴京。

何事かと振り返った衛兵に貴京が告げた言葉は

「この銀貨でお礼が少ないというのならもう一つ、お礼のつもりで衛兵の皆さんの訓練を見せてもらえませんか？」

「……は？」

そんな、衛兵が思わず呆けた声を出す様な願いだった。

「貴京様、どういうことですか？」

「あん？何がだ？」

いまいち釈然としない表情の衛兵を先頭に、衛兵詰所へと歩き始めて数十秒。しっかりと貴京の後ろに付き従っていたアリシアが、衛兵に聞こえないほどの小さな声で貴京に問いかける。

「衛兵の訓練を見たいなんて、何か理由があるんですよね？」

「ああ、そこか。強いて言うなら情報収集だよ」

「情報収集？」

それだけでは分からなかったようで、可愛らしく小首を傾げるアリア。

「そう、情報収集。俺らは未だに聞いた情報だけで、実際にこの世界に住まう存在の戦いつてのをしっかり見たことが無いだろ？ できることなら強者の戦いを見たいんだが、そうそうそんな機会も無いだろう。だからせめて、衛兵の訓練でも見てこの世界の基本的な戦闘方法でも知ろうかと思ってな」

どの世界でも、文化レベルが同じならば基本的な戦闘方法は概ね変わらない。

それは貴京が今までに訪れた数多の世界が証明してくれている。地球で言う中世レベルなら剣、近代レベルなら銃火器、さらに進むと超能力なんてのもあったりするが、大体はどの世界でもこんな感じである。

しかし、例外というのはいつの時代も、どの世界でも存在する。

文化は中世レベルなのに銃火器が世界に溢れ、何故その他の分野が発展しないのか至極疑問に思った世界があった。文化は近代レベルなのに、石器で戦っている世界があった。中には銃火器があるのにいざ戦いを見してみると、攻撃方法は射撃では無く殴打。何のためのその形なのかと、阿呆なんじゃないかと思う。いや多分阿呆だろう。

あくまでこれらは数多に訪れた世界でもほんの一握りであるという注釈がつくが、それでもとにかく、例外というものが存在するのだ。

つまりは、文化が中世レベルで、衛兵が剣を帯びて鎧を纏い、冒険

者ギルドのお姉さんが剣術云々という言葉を使っていたとしても、この世界の人々が抜いた剣をどう使うかは分からないのである。

一見するとこの思考が阿呆だが、銃火器を殴打にしか使わない人に比べたらきつとマシである。

閑話休題。

「とにかく、この世界の衛兵というものを見せて貰おうじゃないか」

「そうですね」

果たしてどのような戦い方なのか、ほぼ間違いなく剣を抜いてそれで斬り合って戦うと予想していながら、貴京は少しだけ、まだ見ぬこの世界の戦闘を楽しみにしていた

「うん、普通だな」

「普通ですね」

微かなわくわく気分で衛兵の後に付いて歩くこと約15分。

衛兵詰所に到着した貴京達は、早速衛兵の訓練を見学していた。結果としては当初の予想通り、衛兵たちは木剣を持ちそれで斬り合って模擬戦をしていたのだが、その普通さ加減にちよつとがっかりである。

「は？普通、とは？」

貴京とアリシアの言葉を聞いた衛兵が首を傾げたが、ちよつとか言いつつ割と沈んでいる2人はそれに気付かなかった。

普通ならばがっかりされ、銃火器で殴打なんて珍しい真似をする阿呆と言われる。世知辛い世の中である。

「うーん、まあ、せつかく見に来たんだし、参加して良いですか？」

と、何やら楽しそうな、割と弾んだ声で言ったのは既にがっかりから立ち直った貴京である。闘技大会の参加が決まった時もそうだったように、彼は模擬戦や闘技大会といった純粋な力比べを好む傾向にあるのだ。

「は……しかし、うーん」

されど、いかに礼をすべき相手と言っても衛兵の訓練に一般人を参加させるのはどうかと、衛兵の方は難しそうな顔で悩む。

「あれ？その人ってあのおっさんを伸した人ですか？」

そこへ掛けられる男の声。貴京達が3人揃ってそちらを向くと、衛兵の鎧に身を包んだ若い衛兵が1人、木剣を持ったまま近づいて来るところだった。

「君は確か、あの時この人の後ろにいた？」

中年男を引き取りに宿屋へやって来た衛兵3人組の中に彼の姿もあったなあと、大して見てもいないのにしっかりと記憶している貴京が問いかける。

「あ、そうです。良く覚えてましたね？」

対する若い衛兵も、まさか自分が覚えられているとは思わなかったのか驚いた様な表情である。

「記憶力にはちょっと自信があつてね」

ちよい自慢。

「成程、そうなんですか。ところで、どうかしたんですか？」

衛兵が悩んでいたのを見ていたのか、貴京のちよい自慢を軽く受け流した若い衛兵が悩む衛兵に問いかける。

「いや、この方が衛兵の訓練に参加したいと言つてね」

指差されたので、とりあえずニコリと微笑んでみる貴京。それに対し若い衛兵は『あー……』とか言いそうな変な顔をした。

「あー……」

というか実際に言った。

「それはやめといった方がいいと思いますよ……うん」

自分の微笑みに対してそんな変な顔をされたのかと結構ショックを受けていた貴京だが、どうやら違ったようで、何やら訓練に参加しない方が良い理由があるらしい。

「どうして、ですか？」

当然、黙っていてもその参加しない方が良い理由は分からないので早速問いかける貴京。先程の微笑みは完全に消え去り真顔である。この時、貴京の斜め後ろで静かに待機するアリシアは『ただけ訓練に参加したいんですか……』と心の中で呆れたが、流石の貴京もこの場面でアリシアの心の中までは読めなかった。

「それはですね、今日はあの人が訓練に参加しに来るんですよ」

「あ、そうだったな!!」

「忘れてたんですか隊長……」

「あの人？」

何やらあの人が訓練に参加するらしいが、貴京とアリシアはあの人が誰のことなのか分からない。そしてさり気なく貴京達と共にいた衛兵が隊長だったことはここで初めて明らかになった訳だが、物忘れを指摘されたことにより発覚するのは何とも言えない感じである。

「それで、そのあの人ってのは」

ザワ……

我慢ならず、あの人の正体を聞こうとした貴京の言葉が途切れる。
感じたのは這い寄る様な威圧感。何やらつい最近同じようなことが
あったと一瞬思った貴京だが、今回その顔に浮かんでいるのは苛立
ちでは無く、不敵な笑み。

何故ならば

「ほう……この力の波動、こいつは面白そうだ」

「貴京様、顔が怖いです」

感じた威圧感は、殺気の類では無く力の波動、気とも呼べるもの。
それも飛び切りの強者からしか感じられない、洗練された強大な威

圧感。

「ど、どうしたんですか？」

いきなり不敵な笑みを浮かべた貴京に、隊長がおっかなびっくり声を掛けるが、既に強大な威圧感の方に意識が移っている貴京はその言葉にさえ気付かない。

何やら威圧感のある不敵な笑みを浮かべた貴京に、自分の言葉を完全無視された隊長はかなり怖い思いをしたのだが、それはまた別の話である。

第15話『お礼と訓練と、さらには強者』（後書き）

最新話投稿、遅くなりました！！申し訳ない！！

プロローグから14話まで多少改稿してありますので、もし興味がある方は一度お読みください。

大筋に変更は無いので、無理に読みなおす必要は無いです。それでは、今後ともよろしく願います。

第16話『現れたのは』

「あら、なんか私注目されてる？」

貴京が強大な威圧感を感じてから数十秒後、訓練場の入り口から悠々と姿を現したその主に、その姿に　さしもの貴京も微かに息を呑んだ。

腰まで伸びた艶のある黒髪に、女性としては少々高めの身長。すらりとした長い脚に、全体的にすっきりとしたボデーラインと、輝く様な白い肌。芸術品の様に整っていながら、女性としての柔らかさを感じさせる顔の造り。まさに絶世の美女といった風情の女性である。

しかし、瞳の奥に秘められた強い意志の光と、腰に帯びた一振りの細剣、そして彼女の身から放たれる強者の威圧感が、ただの美女では無いということを示していた。

「驚いたな、まさか女性とは……」

思わず貴京の口から零れるのはそんな言葉。

しかしそれは、断じて男性優位を意識した侮蔑などでは無い。現に貴京より強い力を持つ神王は女性だし、貴京と同じレベルの力を持つ女性もいる。男性優位などという考えは遠の昔に貴京の心中からは消え去っていた。

なら何故そのような言葉を放ったのか、そこには深い意味など無く

「こんな男だらけの所に絶世の美女が来るとは、得した気分だ」

相好を崩した貴京のその言葉に、思わず近くにいた全員が噴出した。

「フ、フフフッ何を言うかと思ったら」

「生憎、女は男に勝てないなんて考えは何の役にも立たないどころか、完全に自分の首を絞める事にしかない職場に勤めてますからね」

クスクスと笑う女性に、隊長のツバを思いつ切り被った貴京が全力でガンを飛ばしながら答える。隊長はもう泣きそうであるが、今回は自業自得である。

「あら、楽しそうな職場ねえ」

「ええ、良い職場ですよ」

福利厚生もバツチリ、給与も高く、雰囲気も良い。もしも普通の企業だったとしたら、間違いなく競争率の高い優良企業だろう。残念ながら普通の企業では無いため、それは当てはまらない訳だが。

「まあ、それは置いて、貴女が今日訓練に参加すると言うあの人は誰ですか？」

「え？あの人？んー……」

貴京により唐突に切り替わった話題に、女性は一瞬キョトンとした表情を見せるが、しばし考え答えを紡ぎ出す。

「あの人かどうかは分からないけど、確かに私は今日衛兵たちの訓練に参加するために来たわね」

「あ、俺が言ってた『あの人』っていうのはこの方で合ってますよ」

「あら、私みたいね」

「ふむ……」

若い衛兵の補足により『あの人』というのは目の前の女性であることが確定し、いよいよ貴京も事の全貌が掴めてきた。

目の前の女性がかなりの強者であることは、発している威圧感からして間違いない。そして『あの人』などという曖昧な呼称が通じていることから見て、彼女は既に何度か訓練に参加したことがあるのだろう。そうなると当然、その強さも皆の知るところとなる訳だ。

対する貴京は腰に剣を差しているとはいえ、育ちの良い貴族と言った方がしっくりくるような風貌である。その身が纏う威圧感を見れるなら話は別だが、流石にその辺にいるような衛兵ではそれは不可能。つまり、若い衛兵は貴京の強さが分からないのだ。

とてつもない強さを持っている女性が訓練に参加するというのに、強いかどうかも分からない一般人、それも礼をすべき人間を一緒に訓練に参加させるというのは、色々な面から考えて無理だろう。だからこそ若い衛兵は、訓練参加は止めておいた方がいいと進言した、といったところか。

相手のことを思いやる、良い配慮である。

しかし、いらぬ配慮だ。

「成程、奇遇ですね。俺も今日は訓練に参加させてもらっんですよ」

「え？」

「「なっ……」」

貴京の言葉に、女性が意外そうな顔をし、次いで衛兵2人の驚愕が重なる。

怪我をさせないためか、恥をかかせないためか、はたまたそれ以外か。細かな理由までは分からないが、若い衛兵が善意で止めた方が良くと忠告してくれたのは貴京自身十分理解している。しかし、如何なる理由であろうとそれは杞憂に過ぎない。なんせ、貴京より女性の方が断然強いという大前提が間違っているのだから。

慢心などでは無い。客観的に判断した結果、目の前の女性の力では自分に勝てないと貴京は判断したのである。若い衛兵の善意を無下にするのは気が引けるが、せっかくアルカディアの強者と相見えたのだ。今後の任務のためにも、此処で何もせずに引き下がるのは論外である。

だからこそ

「あのですね、この人は冒険者ギルドの」

「大丈夫です、俺、強いですから」

未だに止めようとする若い衛兵の言葉を、貴京はいつぞやと同じような言葉と、同じような不敵な笑みで遮る。

「で、ですがっ！」

それでもなお食い下がる若い衛兵は、さぞ正義感が強いのだろう。人間としても衛兵としても好感が持てる人物だが、今回は無理矢理にでも黙っていて貰わなければならないと、貴京は心に決める。

「大丈夫だと、俺は言っているのですが？」

「っ」

貴京の身から放たれる、静かだが確かな重圧。

まるで巨大なドラゴンに睨まれた様な、そんな錯覚さえ覚えた若い衛兵は、流石に二の句が告げず黙りこむ。此処に来て彼はようやく、貴京の強さを感じ始めていた。

「それ位にしておいたらどうかしら？」

と、貴京と若い衛兵の間に割って入る女性。彼女は若い衛兵を威圧する貴京を真正面から見つめ、微かに表情を険しくして言葉を紡ぐ。

「貴方の力は、こんな事に使うものなの？」

心の奥底に語りかける様な、真剣な女性の言葉。それに対して貴京は、肩を竦める様な仕草を見せつつも真剣な言葉を返した。

「まさか、こちらとしても無駄に力を振りかざすのは心苦しくてしょうがない。俺の訓練参加を認めてくれさえすればすぐに止めますよ」

「だそうよ。私の目から見ても彼は強いわ、貴方達の心配は杞憂だと思っわよ？」

2人の衛兵に語りかけるように、振り返った女性が言葉を紡ぐ。それを受けてもまだ悩むそぶりを見せた2人だったが、

「分かりました、訓練参加を許可しましょう。構わないだろう？」

「……隊長がそう言うのでしたら、俺は何も」

迷った末に隊長が出した答えは、訓練参加への許可。

こうしてようやく、貴京の訓練参加は認められたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6839x/>

次元の平和を守ります!!

2011年11月23日07時49分発行